

2024年7月7日

年間第14主日

菊地功大司教 メッセージ

正常性バイアスという言葉があります。災害などに直面しても、いつもの生活の延長上で物事を判断し、都合の悪い情報を無視することで、根拠のない、「自分は大丈夫」、「まだまだ大丈夫」などという思い込みが、災害時の被害を大きくすることだと、ネット上などにはその意味が記載されています。

多くの場合わたしたちは、人生の中で大きな変化を嫌います。とりわけ予測できない出来事に遭遇したとき、判断するための自らの能力が出来事が超えてしまうため、これまでのいつもの経験に基づいて判断しようとするために、実像を把握することができません。

「わたしは弱いときにこそ強いからです」と逆説的な言葉をコリントの教会への手紙に記すパウロは、人間の思い描く理想とは異なる、いわば逆説の中に、神の真理は存在していることを指摘しています。わたしたちの判断能力を遙かに超える神の働きを知るためには、人間の常識にとらわれていては、実像を把握することはできないことをパウロは指摘します。

いわば信仰における正常性バイアスを捨て去り、人間の力の限界を認めたときに初めて、「キリストの力がわたしのうちに宿」り、その本来の力を発揮するのだと、パウロは指摘します。

マルコ福音に記されたイエスの物語は、この事実を明確に示します。目の前に神ご自身がいるにもかかわらず、人々の心の目は、人間の常識によって閉ざされ、神の働き直視することができません。判断する能力を遙かに超えることが起こっているために、都合の悪い情報から目を背け、自分の常識の枠内で判断しようとするのですから、神の子の言葉と行いを、故郷の人々は理解することができません。

思い上がりのうちに生きている人間は、簡単に過去の常識の枠にがんじがらめにされ、自分たちが正しいと思い込んで選択した行動が、実際には神に逆らう結果を招いていることにさえ気がつかせません。

昨年10月にバチカンで開催されたシノドス第一会期の際に、教皇様は幾たびも会場に足を運び、集まったわたしたちに、「聖霊が主役です。あなた方が主役ではありません。あなた方が何をしたいのかを聞きたいのではありません。政令が何を語りかけているのかを聞きたいのです」と繰り返されました。

教皇様は、「福音の喜び」の中で、「宣教を中心とした司牧では、『いつもこうしてきた』という安易な司牧基準を捨てなければなりません (33)」と呼びかけておられました。

いま教会に必要なことは、前例にとらわれて自らの常識の枠にがんじがらめになることではなく、自らの弱さを認め、神の働きを識ることができるように、聖霊の導きに勇気を持って身を任せることです。